2023 年 10 月 1 日（日）主日朝礼拝説教

『まだ多すぎる』　井上隆晶牧師
士師記 7 章 1～7 節、マタイ 5 章 3～12 節

❶【弱くされる意味は、神を体験するため】

旧約聖書の士師記の中にギデオンという指導者が出てきます。ギデオンは海辺の砂のように数え切れないミディアン人、アマレク人、東方の諸民族の連合軍と戦うために荒野に出ていきます。しかし神様はギデオンにいいます。「**あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう。**」（7：2）こうして恐れる者 2 万 2000 人が帰され、3 万 2000 人いた兵は 1 万人に減らされました。更に主はギデオンに「**民はまだ多すぎる**」と言われ、膝をついて犬のように水を飲む者 9700 人が帰され、わずか 300 人だけが残されました。3 万 2000 人が 300 人に、つまり 100 分の一になってしまいました。聖書の中には、この物語と同じような言葉が出てきます。「**馬は勝利をもたらすものとはならず、兵の数によって救われるのでもない。見よ、主は御目を注がれる。主を畏れる人、主の慈しみを待ち望む人に。**」（詩編 33：17～18）「**主は馬の勇ましさを喜ばれるのではなく、人の足の速さを望まれるのでもない。主が望まれるのは主を畏れる人、主の慈しみを待ち望む人。**」（詩編 147：10～11）

お金が減る、人が減る、健康が減るなど、減るということは心細いものです。反対にお金が増える、人が増える、出来ることが増え、事業が拡大する、そうすると私たちは大丈夫だと思います。大阪府庁に行っても、担当者はいつも数字を見ます。そして言います。「これでやっていけるのですか？」これがこの世の人の見方です。だから私たちも神様に増やしてもらうことばかりを願います。でも、減るということ、つまり弱くなる事はそれだけ神様に助けてもらわなければ生きてゆけないという事ですから、神様を必要とし、神様の助けを必死に祈り求めるようになります。**主は私たちにそのように生きて欲しいのです。そして人間の力ではなく、神の力を体験してほしいのです。神が求めておられるのは、「神を知る事」だからです。知識で知るのではなく、体験として知ることです。**

❷【主が与えられた分に従って生きる事】

●カルト対策委員会に大阪にある単立Ｋ教会やＮＺ教会が半カルト化しているという噂が流れてきます。500 人以上の礼拝をしていて、更に新しい建物を建てています。伝道に熱心なのは良い事です。信者の数が多いことも良い事です。伝道の賜物が与えられているという事でしょう。しかし「信じなければ救われない」と恐怖を与え、さまざまな規則で縛り、非常に律法的です。情報をコントロール

し、感情をコントロールし、行動をコントロールすればカルトと定義されます。それでも多くの人が行ってしまうのです。私たちの教会はあまりにも伝道が下手です。福音を語っているのに人が来ません。なぜだろうかと考えました。

私は、神様は一人一人に「分」を与えたと思うのです。「**おのおの主から与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい。**」（Ⅰコリント7：17）とパウロは勧めます。

●渡辺和子シスターの本の中に修道院での食事の場面が出てきます。修道院では「自分の前に置かれた皿を取りなさい」と命じられるのです。目の前のパンが焦げていても、それを取れと命じられるのです。他の皿を選んではいけません。肉が薄かったとしてもそれを取れと命じられるのです。

私たちの人生もそれと同じです。この時代に、大阪の地に、都島教会に私たちは置かれました。そして自分の周りに主が置かれた人たちを愛しなさいと言われます。出会う人は限られているのです。私に与えられた分があるのです。あなたはもっと欲しいかもしれないけれども、あなたにはこれだけと言われたのです。仕事にも分があります。もっと大きな栄光ある仕事がことがしたくても、この時代に自分に割り当てられた仕事をするのです。**大事なことは自分に与えられた「分」の中で忠実であること、それを喜び、感謝し、満足することなのだと思います。**

❸【神の愛を知る者となること】

●アメリカの実業家で、アップルの創業者であるスティーブ・ジョブスという人がいます。彼は癌でなくなりましたが、最後の言葉を残しています。「私は、ビジネスの世界で、成功の頂点に君臨した。他の人の目には、私の人生は 成功の典型的な縮図に見えるだろう。しかし、仕事をのぞくと喜びが少ない人生だった。…病気でベッドに寝ていると、 人生が走馬灯のように思い出される。私がずっとプライドを持っていたこと、認められることや富は、迫る死を目の前にして色あせていき、何も意味をなさなくなっている。この暗闇の中で、生命維持装置のグリーンのライトが点滅するのを見つめ、機械的な音が耳に聞こえてくる。神の息を感じる。死がだんだんと近づいている。今やっと理解したことがある。人生において十分にやっていけるだけの富を積み上げた後は、富とは関係のない他のことを追い求めた方が良い。もっと大切な何か他のこと。…終わりを知らない富の追求は、人を歪ませてしまう。私のようにね。神は、誰もの心の中に、富みによってもたらされた幻想ではなく、愛を感じさせるための感覚というものを与えてくださった。 私が勝ち得た富は、（私が死ぬ時に）一緒に持っていけるものではない。私が持っていける物は、愛情にあふれた思い出だけだ。これこそが本当の豊かさで

あり、あなたとずっと一緒にいてくれるもの、あなたに力をあたえてくれるもの、あなたの道を照らしてくれるものだ。愛とは、何千マイルも超えて旅をする。…世の中で、一番犠牲を払うことになる「ベッド（賭け)」は、何か知っているかい？シックベッド(病床）だよ。あなたのために、ドライバーを誰か雇うこともできる。お金を作ってもらうことも出来る。だけれど、あなたの代わりに病気になってくれる人は見つけることは出来ない。物質的な物はなくなっても、また見つけられる。しかし、一つだけ、なくなってしまっては、再度見つけられない物がある。人生だよ。命だよ。…」

スティーブ・ジョブスは、死ぬ前に役に立つのは愛だけだと言っています。聖書も同じことを語っています。「**愛は決して滅びない。…信仰と希望と愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。**」（1コリント13章8、13～14節）これは神の愛、信仰、神への希望のことをいっているのです。私の人生がすべて消えてしまっても、神の私に対する愛だけは消えないのです。犯罪を犯す人たちを見ていると「愛に飢えている」のが分かります。間違った方法で愛を満たそうとして犯罪に手を染めたのです。アウグスティヌスは「人間はどんな偽りの愛にも、ひきずられるほど愛に飢えている」といいましたが、その通り彼らは偽りの愛にひきずられたのです。どんなに歳をとっても人は愛に飢えています。

私たちの人生の目的、または信仰生活の目的は、キリスト教が世界を支配することでもなく、信者の数を増やすことでもなく、地上に偉大な業績を残すことでもなく、神を体験（知る）することにあります。すなわち神の愛を体験することにあるのです。そして私たちは見つけたのです。スティーブ・ジョブスは「自分の代わりに病気になってくれる人はいない」といいましたが、自分の代わりに死んでくれる方を見つけたのです。キリスト・イエスです。スティーブ・ジョブスは「物は失っても見つけられるが、命は再度見つけられない」といいましたが、「**私が命である**」（ヨハネ 14：6）と言われた方と私たちは結ばれたのです。このキリストの愛を知ったのです。**神の愛を知った人は、この世に認められることも、名を残すことも問題でなくなります。死を前にして役立つのは、完全な愛の体験だけです。信仰が問題なのです。小さくても、少なくても、弱くても、病気でも、死を前にしても良いのです。その中に溢れるような信仰と、キリストを喜ぶ心と、キリストに対する愛があれば、その人の人生は勝利したようなものなのです。**神の愛を体験することに人生の残りの時間を用いていただきたいと思います。